

## 昭和44年度購入作品の報告

著者	山田 智三郎
雑誌名	国立西洋美術館年報
巻	4
ページ	3-7
発行年	1971-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1263/00000656/">http://id.nii.ac.jp/1263/00000656/</a>



ヨアヒム・パティニール 《エジプト逃避途上の休息》

## 昭和44年度購入作品の報告

(新収作品目録参照)

山田智三郎

Nouvelles acquisitions

(voir aussi pp. 8~15)

par Chisaburoh F. YAMADA

国立西洋美術館は、昭和44年度の購入予算5,000万円をもって、絵画5点、素描1点、彫刻1点、計7点を購入した。絵画はフランドル・ルネッサンスの画家パティニールの小祭壇画、17世紀オランダの風景画の代表作家ヤコブ・ロイスダールの風景画、スペインのバロック絵画の代表作家の一人であるムリーリョの油絵習作、フランス・ロココの雅宴画家パテルの小品、英国肖像画の黄金時代を代表する画家の一人レイノルズの肖像画で、いずれも、その時代を代表する美術史上重要な作家の作品であり、レイノルズの肖像画を除いては小品ではあるが、いずれも各作家の芸術とその様式を十二分に示す優秀な作品である。

以下各作品について簡単な説明を記して作品購入の報告とする。

ヨアヒム・パティニール (1485?—1524)

《エジプト逃避途上の休息》

油彩 板 中央パネル 31×20㎝ (原色図版)  
両翼 各 31×9㎝

もと、アムステルダムのある有名なグドスティッカー・コレクションにあったもので、同コレクションの図録に図版が載っている。その後、アムステルダムのファン・ツヴァン氏の所有となったが、画商モント氏の手を経て本館の所有となった。

フランドル画研究の権威であったマックス・フリードレンダー博士は、この絵の鑑定書に、中央のパネルはパティニールの1515年頃の作と考えられ、両翼は同時代の他の画家の仕事であると記している。両翼には各3個の円形内に、

キリスト伝が描れている。

パティニールはフランドルにおける詩的情趣をもつ風景画の開拓者として重要な画家で、彼の描いた宗教画は大きく広がる風景画の中に人物を余り大きくなく描きこんだものであった。この祭壇画の中央パネルも、彼の得意とした風景画の中央前景に、エジプトへの逃避途上休息する聖母子の姿を描き出している。聖母子は中央に四分の三正面向きに描かれているが、それは礼拝の対象としての考慮からであろう。前述のフリードレンダー博士はその大著 *Die alt-niederländische Malerei* の第九巻で、この絵をベルリンのカウフマン・コレクションにあった同じ主題のパティニールの大作（1904年火災にあって破損、修理されて現在フランクフルト・アム・マインのカウス氏所蔵）に基いて描いたものだと指摘している（156頁）。背景の風景はことになっているが、麦を刈る人物のいる畠と、右方遠景の美しい川の流れは同じである。聖母子は全く同じであり、ヨセフとその背後の驢馬もほとんど同じ構想で描れている。小型の絵であるだけに、風景に対する人物の大きさの比率は、カウフマン祭壇画の場合よりは大きくなっているが、パティニール独特の詩趣豊かな自然描写は十二分に味える。

なおプリンストン大学のコッチ教授は、その著『ヨアヒム・パティニール』（1968年刊）において、パティニール自身の手になるカウフマン祭壇画のヴァリエーションとして、この絵画の外に、さらに2点をあげている。

バルトロメ・エステバン・ムリーリョ（1617—1682）

《聖フスタと聖ルフィナ》

油彩 カンヴァス 34×24㎝

現在セビーリヤ美術館にある大作《聖フスタと聖ルフィナ》を描くにあたって、その構想を油彩で描いた習作である。現プラド美術館長アングロ氏は、そのムリーリョに関する小論文の中でこの習作を紹介して、1665年から66年の作としている。セビリヤの守護聖女とあがめられる二人の姉妹を同市の塔を支える姿で描いたもので、完成作は下方に描れた土器の位置が異なる外は、この習作とほぼ同じ構図で描かれた。

完成作は今年（昭和45年）東京国立博物館と朝日新聞社の共催によるスペイン美術展にたまたま出陳され、同じ上野で両図を比較検討する機会に恵まれた。習作は描きこんではないが、人物も、質感のこもった豊かな衣服のひだも、軽快に生き生きと描かれている。それに対し、完成作は大型の絵であるだけに、ムリーリョの大作がしばしばそうであるように、弟子の手がかなり加わっているらしく、部分的にはこの大家にふさわしくないかたい表現が見られ、ことに向って左の聖女の衣服のひだの取扱いなど、ごちなく重々しい。習作は、作家の脳裡に生れた構想をそのままに、手早く筆を走らせて描き出したものだけに、作家の美的感情がそのままに現われて居り、ムリーリョ独特の優雅さと優しみに満ちた佳品である。

ヤコブ・ロイスダール(1628/29—1682) 作

《小さな瀧のある風景》

油彩 板 27.5×35.8㎝

右下方に、VRのモノグラムと1661の年記あり。

17世紀のオランダ風景画美術の高さを示す例として購入した。ケニス・クラークはその名著『風景画論』で、ヤコブ・ロイスダールのことを、「彼はコンスタブル以前では最大の自然主義的ヴィジョンの持主にかぞえられるべき人であり」、「真にワーズワース的な迫力をもって、単純な自然の偉大さや哀感を胸にうけとめた」（佐々木英也訳）と書いているが、この風景画は、大作ではないが、そうした彼の芸術の真価をよく示している。この絵の樹木、岩はだ、草地、水の流れの描写に見られる、微妙な色調の変化による光と影の対比の妙は、クラークが、この画家によって、「事実はふたたび光によって、現実のより新しい境域に高められた」といっていることの好例である。

もとドイツのゴットシャルド・コレクションにあり、1903年ライプツヒの美術館に寄贈され、同館に長らくあった（1924年の同館のカタログによると目録番号807）。その後、同館の現館長ウィンクラー博士から筆者宛ての書翰によれば、1933年モムペルの絵画二点と交換されて、アムステルダム画商ド・ボールのものとなった。モムペルの作品は少ないのみならず、当時モンペルの美術史的価値が再認識されはじめたからであろう。その後売却されてストックホルムの個人蔵となり、1955年さらに売られてパリのヴェルトハイマー氏の所蔵となった。

ホーフステード・ド・グロートの17世紀オランダ絵画の作品目録には作品番号237として、ヤコブ・ローゼンベルク教授の『ヤコブ・ロイスダール』（1928年刊）には作品番号584として載っている。

ジャン・パティスト・フランソア・パテル  
(1695—1736)

《野営（兵士の休息）》

油彩 板 17×23㎝

気むずかし屋であつたワトーの唯一の直弟子で、その華麗で詩的な芸術様式を忠実に継承したパテルの可愛らしい佳作である。ワトーの作品を買うことが全く不可能な現在、彼の作品に更るものとして、初期ロココ絵画の美と様式を示す典型的な作品として購入した。ワトーとパテルが特に得意とした雅宴画ではないが、やはり得意の題材である男女遊楽の楽しさを描く華麗、優雅な風俗画である。雅宴画が貴族の生活を理想化して描いたように、この絵も兵士の生活と周囲の自然を詩化し、優雅化して描いている。そうすることによって愛の歓びと人生の楽しさを（師と同じように身体が弱く、早死を怖れていたパテルは、自然の美しさも、生きることの歓びをも、人一倍強く感じていたように思われる）華やかに唱い上げている。

ワトーは若い時兵士を題材にした風俗画を描き、雅宴画を描くようになってからも、兵士を題材にした男女遊楽の図を何点か描いている。現在は失なわれているが、そうした絵が何点かコシャンやモローによって銅版画に複製されている。その一つがモローによって版刻されてい

る《縦隊行進》と《休息》の一対である。この《休息》からアイデアを得て描れたと思われるのが、このパテルの《野営》である。

この絵自体も前にはワトーの作かと考えられ、クロード・フィリップス(Claude Phillips)の『アントワヌ・ワトー』(1895年刊)には、そのように記されている(28頁)。筆触に生気がみなぎっていて、パテルにしては非常に出来の好い絵であるが、一寸とした身体の動きや、光と陰の微妙なたわむれに心の動きを伝えるワトー独特の表現に欠けていて、やはり弟子の作であることを思わせる。

この絵は、1891年冬のロンドンのロイヤル・アカデミー主催の「オールド・マスターズ」の展覧会にワトーの作品として出品された。同展のカタログの47番《野営》がこれで、故ジェームス嬢所蔵として、「兵士と女達がいくつかのテントの外で楽しんでいる。そのうちの一人の女性と一人の子供は驢馬に乗っている。中景に城があり、その背後に丘のある風景が描かれている。パネル、6.5×8.2インチ」と記載されている。この展覧会后、数ヶ月して、この絵を含むジェームス・コレクション(故ジェームス嬢の父親が蒐めたもの)はクリスティで競売された。

ジョシュア・レイノルズ (1723—1792)

《ホルダネス伯、ロバート・ダーシーの肖像》

油彩 カンヴァス 76.2×63.5㎝

英国の生んだ二大肖像画家の一人、レイノルズの中期の作品で、1752年、3年間のイタリア

旅行から帰ってから3年後の作品である。地味な男性肖像であるが、この画家の対象の特性を生々と描き出す達者な技巧をよく示しており、後期の、ルーベンスから習った輝きのある色調は見られないが、18世紀に発達した英国の肖像画芸術の好例として購入した。レイノルズの肖像画依頼者帳簿の1755年2月の部の記載によって、この絵は1755年に描かれたことが分る。当時レイノルズは既に肖像画家として声名高くロンドンの社交界の寵児になっていた。また描かれたロバート・ダーシーはこの時既に、駐ヴェニス共和国大使や駐オランダ全権公使を歴任し、大臣にもなったことのある官界の重要人物であった。レイノルズが描いた友人ハンティングドン卿の肖像画を見て非常に気に入り、レイノルズに自己の肖像画を依頼したのだという。彼の友人メーソンが、この絵を描いた時立会って、その描きぶりを書いたものが現存している。

ロバート・ダーシーの孫娘は、二代目のチチェスター伯爵トーマスと結婚し、この肖像はそれ以来チチェスター家に最近まで伝わった。また、この絵は1811年クーパーによって銅版画に複製されている。

ウジェーヌ・ドラクロア (1798—1863)

《人々を慰める平和の女神》(素描)

鉛筆 紙 20×39㎝

中央下部に、ドラクロアのアトリエ印が押されているだけで、来歴は分らないが、高階技官を中心として本館館員が調べたところによれ

パテル P  
ロイスデル P  
ハリー P  
ロイスデル P S  
ハリー P  
ロイスデル P  
ハリー P

ば、ドラクロアがパリ市庁舎の「平和の間」の天井画（1854年3月完成、1871年焼失）を描く際に、構想を練るために描いた素描の一つかと思われる。

ドラクロアが、絵全体の構想を描いた素描には、画想の湧くがままにそれを素早く描き出したものと、一つの構図がかなりまとまってから、比較的丁寧に、ディテールにも相当気を使って描いたもの（例、フォグ美術館にあるサン・シュルピス寺の「ヤコブと天使の闘い」のための素描）とがあるが、これは後者のタイプに属する。但し、実際にドラクロアが市庁舎に描いた天井画は、この図とは全く構想の異なったものであった。

に成功した、ブールデル芸術の特性を示す傑作の一つである。

#### エミール・アントワーン・ブールデル (1861—1929)

##### 《アポロンのマスク》

ブロンズ 50×22×23㎝

ロダン風の仕事から出発したブールデルは40才の頃から、量感の強いマッスの確固たる構成によって、恒久的な力強い生命力のモニュメンタルな表現を追求するようになり、独自の芸術様式を確立した。この新しい様式で最初に作られた傑作が、1900年作のこの《アポロンのマスク》である。師のロダンは、この首を見た時、「君は私から離れてゆく」と云い、「しかし君がこれ以上の高みに登ることはないであろう」と云ったという。

これは彼の芸術発展上劃期的な作品として重要であるのみならず、小型の作品ながら、モニュメンタルなフォルムの単純化と構成美の達成